

最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川歯科大学大学院歯学研究科 歯髄生物学講座 天川 丹 に

対する最終試験は、主査 木本 克彦教授、副査 玉置 勝司教授、

副査 二瓶智太郎准教授により、論文内容ならびに関連事項につき口頭試問を

もって行われた。

その結果、合格と認めた。

主 査 木本 克彦

副 査 玉置 勝司

副 査 二瓶智太郎

論 文 審 査 要 旨

根管充填歯の垂直歯根破折に関する臨床研究
—歯根破折の早期診断法と破折防止法の確立—

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

歯髓生物学講座 天川 丹

(指 導：石井 信之 教授)

主 査 木本 克彦 教授

副 査 玉置 勝司 教授

副 査 二瓶智太郎 准教授

論文審査要旨

学位論文である「根管充填歯の垂直歯根破折に関する臨床研究—歯根破折の早期診断法と破折防止法の確立—」は、根管充填後の垂直歯根破折歯を対象として歯根破折と臨床所見の相関関係を解析し、歯根破折の早期診断法確立と破折を防止することを目的とした論文である。垂直歯根破折歯の保存治療は極めて困難で、歯科医療において最も解決すべき問題と考えられていることから、臨床に大きく貢献することは明らかであり、大変意義ある研究目的である。本研究では、八ヶ岳歯科に来院した患者420名（29～79歳）、459症例の垂直歯根破折歯を対象とした。対象歯は根管充填後の定期検診時に歯根破折と診断され、臨床症状、エックス線所見、支台築造形態と性状を臨床的に精査して歯根破折との関連性を調査した。なお、歯根破折の確定診断は歯科用実体顕微鏡所見と外科治療時の直接観察で行った。その結果、本論文は、①歯根破折は50歳代に最も好発し、歯種別では下顎大臼歯が最も多かった。②歯根破折歯は打診反応が共通して認められた。③歯根破折の特徴的エックス線所見（Perilateral radiolucency、“Halo” radiolucency）は全体の20%を示したが、他の症例は歯周病変および根尖病変との鑑別診断を必要とした。④歯科用実体顕微鏡による確定診断は有用であった。⑤歯根破折歯の80%は歯冠部限局のコアおよび根管長1/4以下のポストコア症例であることを明らかにした。以上の結果から、歯根破折の早期診断には定期検診による打診反応と規格エックス線所見が有用であり、確定診断には歯科用実体顕微鏡所見が極めて有用であること。そして、根管充填後の垂直歯根破折防止には根管長1/2以上のポストコアが有用であるという新しい臨床知見を見出したことは高く評価できる。

本審査委員会は、研究デザイン、破折の診断基準、破折に影響を及ぼす因子、結果の解釈等について指摘がなされ、それらに対して申請者より研究デザインの限界・統計処理の妥当性等において十分な回答が行われた。その結果本研究より、根管充填歯の垂直歯根破折の実態が明らかとなり、早期診断法確立や破折予防のエビデンス構築に大きく貢献するとの結論に至った。また、臨床能力については、専門医により試験が行われ、高い診療技術を有していると評価された。そこで、本審査委員会は、申請者の博士論文が博士（臨床歯学）の学位に十分値するものと認めた。